



[図書館談話室] 平成13年度漢籍担当職員講習会（初級）参加報告書

著者	古川 富美子
雑誌名	関西大学図書館フォーラム = Kansai University Library forum
巻	7
ページ	64-67
発行年	2002-06-28
URL	http://hdl.handle.net/10112/00022091

平成13年度漢籍担当職員講習会(初級)参加報告書

古川 富美子

漢籍の整理に携わる図書館員等を対象に、基礎知識が学べる初級の講習会を受ける機会を得た。

以下はその報告である。

1. 主催 文部科学省
京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター
2. 期間 平成13年11月5日(月)～11月9日(金)
3. 場所 京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター
4. 内容 中国目録学
 - (1) 四部分類法について
 - (2) 漢籍目録カ - ド作成

(1) 四部分類法について

講習は午前と午後の二部に分かれ、午前中は四部分類について、一日一部ずつ、それぞれの分野を専門とする研究者から講義を受ける。

かなり高度な内容の講義もあり、十分に理解できたとはいえないが、分類法が中国の歴史や学問体系の変遷と深く関わってきたことや、研究者の立場から見た目録の重要性など、様々な視点からの話を聞き、四部の世界への理解が少しずつ深まっていた。

四部分類とは、全体を^{けいぶ}経部・^{しぶ}史部・^{しぶ}子部・^{しゅうぶ}集部の、四つに分ける方法である。

紀元前から目録が編纂されていた中国には、四部、五部、六部、八部、十二部などの分類法があったが、主流としては六部分類法から四部分類法へとということになる。

目録史上重要な書物とされる、前漢の劉向・劉歆父子が完成させた『七略』が六部分類法であった。『七略』は亡佚したが、現存する最古の目録『漢書』藝文誌に六部分類が受け継がれ、その内容を知ることができる。

四つに分ける方法は、晋の時代の『中経新簿』などに登場するが、経史子集の形が成立したのは、唐代の『随書』経籍志である。そして、その内容は拡大・縮小しながらも今に受け継がれている。

『七略』、『随書』経籍志、『四庫全書総目』という中国目録学の代表的著作から、漢・唐・清の三つの王朝、古代・中世・近世という時代、どのような書物が書かれ、どのような学問が重んじられていたのかを知ることができる。目録はそれぞれの時代の学術を総括したもの、知的営みを凝縮したものであり、その鍵となるのが分類法ということになる。

経部

四部分類の特徴は四つの部が並列な関係にあるのではなく、経部を中核として形成されていることで、それは中国の学問が儒学を根幹としていることにある。

経部には経書(儒家の書)と、それを読むための字書類だけが分類される。

経部の中心となるのが「易」「書」「詩」「礼」「春秋」の五経で、「易」とは古代人の思索生活の記録、「書」とは古代人の政治生活の記録、「詩」とは古代人の感情生活の記録、「礼」とは古代人の作法の記録、「春秋」とは古代のある期間の歴史を記録したもの、である。

五経には古典とよばれる、人間の生活の規範となるものだけが選ばれている。単に古いというだけでは古典とはいえず、「経」という高い地位に置かれた、一群の書物だけが途方もない権威を持ち、四部分類の中核を成している。

四部分類の内容は時代と共に変遷するが、この経部だけは変化の乏しい部となっている。

史部

史官の記録を収める部である。四部分類が成立するまでは「史」という名は無く、『春秋』に附したのものとして扱われていた。時代と共に「史」の著作が多くなり、史学が独立していく過程で史部が成立する。この史部の成立が、四部分類法が登場した時期における最大の特色といわれ、その発端となったのが司馬遷の著した『史記』である。

史部の中心となる正史は、司馬遷が『史記』で試みた、紀伝体というスタイルをとるもので、各王朝の帝王の年代記である「本紀」、各王朝で活躍した

様々な人物の伝記である「列伝」、文化・制度などをジャンル別に記した「志」、年表や系譜である「表」の四つから構成される。

正史の他に、編年・伝記・地理・金石などがあり、さらには書目や政治・経済の分野も史部にはいる。

四部の中では、分類の数も著作の量も、最も多い部となっている。

子部

子部は「諸子百家」に入っている書物だけを収める部であったが、他の三部に入らないものを押し込めていくようになり、まとまりに欠けた変遷の激しい部となっている。

儒家類 経部に分類できない儒家の書

兵家類 軍事の理論書(軍政の書物は史部)

法家類 法律の理論書(条文などは史部)

農家類 農業・園芸・牧畜・水産の書

医家類 医学書・本草書

天文算法類 天文学・算術

術数類 占いの書

芸術類 雑技術の類で、近代の芸術とは異なる

雑家類 経史子集のどこにも分類できない書や、重要な書物であってもその学問が衰退し、本の量が少ないために類をたてることのできないものを収める

類書類 百科全書を収めるが日本の百科事典とは体裁が異なる

小説家類 「儒」の教えにとってはとるにたらぬもの(説)を収める(現在の小説に近い)

以上が儒教の世界の書物を収める類となっている。この後に

釈家類 仏教関係の書

道家類 道家の書物と、道教の経典

がくる。

この二つはそれぞれ独立した巨大な学問体系を成しており、決して軽んじられるものではないが、四部分類が儒教を中心としているため、この位置に置かれている。

集部

儒学の思想から一番遠いのが、集部である。

中心は文学作品だが、この時代の文学というのは「詩」「文」であって、小説や戯曲のことではなかった。

集部の集は、作品集の集からきている。一つの文は2～3丁程度のもので、詩も数行のものである。それらを集め、文集・詩集という形にして、書物の

体を成していたのである。

科挙の登用試験に合格するには、詩文を作り読みこなす力が必要であったため、レベルの高い作家は即ちレベルの高い政治家・役人であった。

時代を経ると、子部にあった戯曲や小説の類も集部に加わる。

その他

今日ではこの四つの部の後に、叢書部と新学部が設けられている。

叢書部は、複数の著作を一つのまとまりとして編集したものを収める部で、もとは子部の雑家類に分類していた。

新学部は、アヘン戦争以後中国に西洋の学問が入り、「新学」という概念が生まれたことで、四部では収まりきれないものが出てきたため、新しくできたものである。

これらの部はさらにそれぞれ類・属・目と展開し、書物を分類していくが、分類作業はそう単純ではない。

例えば子部の儒家類にあったように、儒者の個人的論考や、経学以外の議論を含むものは、経部ではなく子部となる。また、地理は一般的には史部だが、『書経』の一面として論じたものは経部に入る。書名に「詩」とあっても、『詩経』に関連しないものは集部である。このような決まり事が多々あり、それらに則して分類するには、中国の学問を理解し、本の内容をきちんと把握しなければならない。

今回の研修では、分類法については講義を聞くだけで、実習は無かった。初級の講習では、四部の緒に就いたというところである。

(2) 漢籍力 - ド目録作成

毎日午後の時間は、カード目録の作成に費やされた。

実習教材として用意された漢籍を、各人が選び取り、カードを作成しながら、分からない点を講師に質問する、という個人単位の研修である。

扱った資料により難易度が違い、複雑な資料の書誌を作成したほうが断然得ることが多く、講師にどんどん質問した人がより理解を深めることになる。かといって、よく調べもせずに質問したり、アドバイスを求めると、工具書をきちんと調べたか、何を根拠にそう判断したのか、などと逆に質問されることになり、厳しい授業でもあった。

漢籍は著者に関する情報や出版の経緯などを、序

や跋から読み取らなければならないことが多く、巻頭や封面、奥付などを見るだけでは不十分である。

合刻や合綴については、著者が同一かどうか、分類の異なる書物が含まれていないかどうか、などによって書名の記入の仕方が違い、内容が理解できないと正確な書誌はとれない。

年譜や、補遺・校勘記・索引等も書名に続けて記入するため、巻末までしっかり目を通す必要がある。

撰者は、図書になくても可能な限り調査し、本姓名を調べ、王朝名を調べと、何種類もの人名辞典で確認することもある。

出版事項はその書物が、何時、何処の、誰が、どのような底本を用いて、何処で刊行した、どのような種類の本であるか、ということ拾っていく。うまくいけばその書籍の来歴がわかり、なかなかドラマチックな作業となるが、これらをきちんと記している本は極めて少なく、苦しむことの方が多い作業である。

最終日に模範解答が配られ、5日間の成果を自己採点していく。そして、序や跋をきちんと読まず、撰者や出版事項を充分調べず、安易な書誌を作った自分の姿が、はっきりと見えるのである。

恐れることは無いけれど、易々と漢籍の書誌をとってはなりません、と深く反省した最終日であった。

5. 職場に戻って

昨年4月から文庫業務を任せられ、全く経験の無い漢籍の整理を担当することになった。前任者は遙か高槻のキャンパスへ移り、熟練の担当者は産休・育休のため一年間不在。指導者も相談相手も無いまま、業務を進めて行かなければならなかった。

さらには、図書館が平成14年度から運用を開始する新システムに向け、整理中の文庫の書誌データを、NACSIS-CAT総合目録に対応したものに変更することも求められていた。

文庫の整理は、まず定時職員に通りの書誌をとってもらい、それを専任職員がチェックしながら、より正確なデータに仕上げていくという方法で進めている。定時職員は主に中国文学専攻の大学院生で、漢文が読めることと、中国の学問体系や文化、書物に関する彼らの知識に助けられている。しかし、その知識を十分に活かせるかどうかは、私の力量にかかってくる。わずかな和古書整理の経験だけでは、判断を下せないことが多く、マニュアルや漢籍に関

する書物、書誌学辞典などと首っ引きで、あれこれ悩む日が続いた。

頼みの綱は、京大人文研の漢籍目録であるが、資料と京大目を突き合わせても、なぜこういう書誌になるのか理解できないこともあった。

このような状況にあって、9月に本学で開催された国立情報学研究所の目録システム講習会と、この漢籍講習会は時宜にかなったものであった。

一週間の初級の講習では、基本的なツールや書誌を取るポイントを教わり、これまで持っていた疑問点を解決するので精一杯だった。しかし、漢籍に精通した人物がすぐ傍にいて、間違いを的確に指摘してもらえ、安心して書誌作成ができる環境に、一時でも身をおけたことは幸せであった。

さらに、京大人文研の空気に直接触れ、漢籍を扱う人々の情熱を感じたことで、古籍を次代に引き継いでいく我々の仕事の重要性と、責任の重さを再認識した。

また、講師の方々との雑談の中で、国立大学は昨今予算が潤沢ではないことから、新しい資料を扱う機会が少なく、内藤湖南、長澤規矩也、中村幸彦、と著名な方々の旧蔵書を順次受け入れている、関西大学を羨望されていた。と同時に、一日も早く整理を終え公開してくださいと言われ、貴重な資料を蔵する図書館として、評価されていることを嬉しく思いつつ、遅々として整理の進まぬ文庫の担当者にとっては、辛い言葉でもあった。

講習の最後に、全国漢籍データベース協議会についての説明があった。これは、国立情報学研究所と東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター、そして京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センターが幹事となり、全国規模の漢籍データベースの構築を目的としている組織である。

本の内容に即した単位で記録を作成する伝統的な漢籍目録と、NACSIS-CAT総合目録データベースでは、書誌事項の見方や、分類方法などが大きく異なるため、NACSIS-CATとリンクはするが、別個のデータベースを構築するというものであった。

この計画への協力依頼があり、今なら各館が漢籍の書誌の分かるものを提供すれば、原則、入力から校正までの作業を協議会が行い、さらに冊子目録を作って返してもらえると、お得な情報であった。

全国の漢籍を網羅した、書誌的な典拠としての、このデータベース構築に協力することは、漢籍を所蔵する図書館の責務であると思う。しかし、NACSIS-CAT

に対応している館では、構造の違う書誌を、自館のシステムとどう関連付け、管理していくのかという問題がある。また、将来、書誌作成は各館でというようなことになれば、余力の無い館では、2種類の書誌を作る負担は大きいなと感じた。

初級の講習を終え、漢籍の世界への入口に立ったとまでは言えないが、入口が見える場所あたりには導いて頂いたと思う。重荷に感じていた漢籍の世界に、少し近づくことができた講習会に、謝謝。

参考文献

『中国目録学 四部分類法について』京都大学人文科学研究所
附属漢字情報研究センター

(学術資料課 ふるかわ ふみこ)